

ローマ人への手紙第一五回質問

9 それでは、この幸いは、割礼のある者にだけ与えられるのでしょうか。それとも、割礼のない者にも与えられるのでしょうか。私たちは、「アブラハムには、その信仰が義とみなされた」と言っていますが、

10 どのようにして、その信仰が義とみなされたのでしょうか。割礼を受けてからでしょうか。まだ割礼を受けていないときででしょうか。割礼を受けてからではなく、割礼を受けていないときにです。

11 彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。それは、彼が、割礼を受けないままに信じて義と認められるすべての人の父となり、

12 また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです。

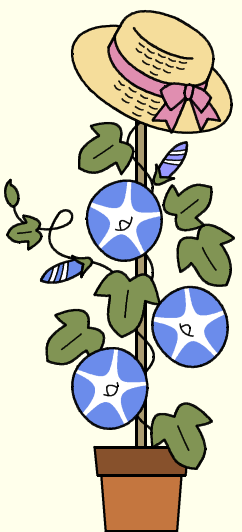
(ロマ四章九―一二節／新改訳2017)

(問一) アブラハムの生涯において、割礼はどんな意味がありましたか。

(問二) だれがアブラハムの子供ですか。

(問三) 11、12節の教えを理解することは、キリストを信じた異邦人を認めることについての初代教会の論争(使徒15章)に、どんな影響を及ぼしたと考えられますか。

(グループ聖書研究・聖書を読む会手引より)



信仰のみによる救い

(ロマ四章九―一二節)

信仰のみによる救いと言う場合、それは非常に深いことを教えております。人間は、いつも何かしら善行なり難行苦行なりといった人間の側のわざをしなければ救われないと思ひ込んでいますが、聖書が信仰だけで救われると教えているのは、そのような人間の側の何かが救いに役立つことはないのだということ。人間の側の何らかのわざは、人間の心に自己慰めや自己満足を与えるかもしれませんが、そんなもので救われるほど、罪からの救いはなまやさしいものではないのです。そこで、聖書は、キリストの贖い以外の方法で、わたしたち人間が罪から救われることはありえないということ。を、はっきり言明しています。

ところで、この信仰のみによる救いというものは、神の選民として割礼を受けたユダヤ人だけのものなのでしょうか。決してそうではありません。このような疑問は、異邦人クリスチャンの多い今日のわたしたちには、余り、なじみのないものであるかもしれませぬ。しかし、当時の世界では、大きな問題であり、とくにユダヤ人たちはこのことを問題にしました。しかし、この問題は、実はユダヤ人にだけ関係している問題ではなく、今日のわたしたちにも関係しておりますので、ごいっしょにこの問題を学んでいきたいと思ひます。

ダビデ王の「幸いは、割礼のある者だけに与えられるものなのか、それとも、無割礼の者にも与えられるものなのか」という疑問は、当時のユダヤ人たちが抱いていた疑問です。つまり、信仰義認の教えというものは、ユダヤ人のためのものなのか、それとも異邦人もそれにあずかることができるの

かというのです。このような疑問は、割礼の価値についてのユダヤ人の考え方から出て来るものでした。彼らは、自分たちが神の選民として選ばれているのは、割礼という礼典を受けているところに、その重大な意味があると考えていました。ですから、異邦人が改宗して、神の選民の祝福にあずかるためには、割礼を受ける必要がありました。それほど、彼らにとつては、割礼は重要であつたのです。ですから、異邦人のことを「無割礼の者」と呼んで、彼らを軽蔑しておりました。

このような事情の下にあつて、パウロはここに割礼の礼典制定の歴史から説明をしています。「というのは、わたしたちは、『アブラハムは、その信仰が義と認められた』と言っているが、それでは、どのようにして、その信仰が認められたのか。割礼を受けてからか、それとも、受ける前か。割礼を受けてからではなく、無割礼の時であつた。そして彼は、無割礼の時に、信仰によって受けた義のしるしとして、割礼を受けたが、それは、彼が無割礼のまままで信じて義と認められるすべての人の父となるためである。また、割礼のある者ばかりでなく、わたしたちの父アブラハムが無割礼の時に持った信仰の足跡に従つて歩むすべての人の父となるためなのである。」

アブラハムが信仰によって義と認められたのは、創世記一五章六節にしるされています。そして、割礼の礼典が制定されたのは、創世記一七章であつて、その間少なくとも一四年間の歳月がありました。アブラハムは割礼の礼典を受けるまでの一四年間も、信仰によって義と認められた以上、神との交わりを持っていたはずで、そうすると、割礼を受ける前

にも、彼は、神との交わりを持っていたのですから、割礼を受けたか受けないかには関係なく、彼は神との交わりを持っていたわけです。それでは、割礼とは何なのでしょうか。

「彼は、無割礼の時に、信仰によって受けた義のしるしとして、割礼を受けた」と言われているように、信仰義認のしるしなのです。このことは非常に重要なことであって、アブラハムは割礼によって救われたのではないということです。礼典は人を救うものではありません。人が救われたことのしるしにほかなりません。

そしてこのことは、ただ単にアブラハム個人についてのことだけなのではなく、「彼が無割礼のまままで信じて義と認められるすべての人の父となるため」、「また、割礼のある者ばかりでなく、わたしたちの父アブラハムが無割礼の時に持った信仰の足跡に従って歩むすべての人の父となるため」なのです。アブラハムとその子孫への祝福は、ここに言われているとおり、アブラハムの肉の子孫であるユダヤ人のためなのではなく、アブラハムの信仰の足跡に従うすべての信者、つまりクリスチャンのためにほかなりません。

ですから、わたしたちは気をつけなければなりません。今日でも礼典によって救われると教える人々がいるのです。洗礼を受けることによって救われると教える人々がいます。ローマ・カトリック教会はすべてそうですが、プロテスタント教会の中にも、少なからずおります。これをバプティズム・リジエネレーションの教えと呼びますが、これはここで聖書がはっきり拒否している間違いの教えです。わたしたち

は、洗礼を受ければそれで救われるものではありません。また、クリスチャン・ホームに生まれたからと言って、救われるものではありません。わたしたちが宗教的行事に参加したからと言って、それで救われるわけではありません。ひとりひとりが、キリストの十字架の贖いをわたしのためとして受け止め、それを信仰によって受け入れる時、救っていただくことができ、それは絶対にあります。

わたしたちは、聖書の教えに耳を傾ける必要があります。たとえそれがむずかしく見えても、それを改作したり、自分につごうがいいように改変したならば、そのような教えは、決して人を救うものではありません。もしわたしたちが自分は洗礼を受けたのだから救われているのだと思ひ込もうとしても、聖書のこのはつきりとした教えを、どのようにしてごまかしきることができのでしょうか。わたしたちがこの世の終りにおいてさばかれるのは、聖書の教えによってであつて、教会や人間の教えによるものではありません。ですから、聖書の教えに従わなければ危険千万です。もし心に平安がないとするならば、神のことばである聖書のみことばによって裏づけされていないからに相違ありません。それでは、聖書は何と言っているでしょうか。この個所と全く同じことを教えているほかの個所を見えますと、次のように教えています。「キリスト・イエスにあつては、割礼があろうとなかろうと、そんなことはどうでもいいことであり、愛によって働く信仰こそ重要なのである。」⁽²⁾「割礼のあるなしは、どうでも

いいことであり、新しく造られることこそ重要なのである。」⁽³⁾
聖書の教えは非常にはつきりとしていて、礼典に救いの土台を置いてはいないということです。信仰によって新しく造られること。つまり新生こそ重要なのであり、その時、神はわたしたちの罪を赦し、義を認めてくださいます。礼典である洗礼はそのしるしなのです。目に見えない霊的普遍的教会の一員としていただく時、わたしたちは聖霊によってバプテスマを受け、キリストに結び合わされるわけですが、そうした人が、目に見える制度的教会に加わる時、洗礼の礼典を受けるわけです。礼典は正しくなされる時意味がありますが、礼典を救いの手段と考える考え方は、聖書が否定しています。というものは、そういうものは、あくまでも人間の側のわざとなるからです。しかし、救いは徹頭徹尾神の恵みによるのであって、わたしたちの側から言えば、信仰によって受け入れるだけです。救いはただすべて神のものなのです。

注(1)エペソ教会への手紙二章一一節。

(2)ガラテヤの諸教会への手紙五章六節。

(3)ガラテヤの諸教会への手紙六章一五節。

